烏里雅蘇台志略にみえる，最古の可能性のあるトゥバ語語彙について

等々力　政　彦

1．はじめに

清代の作とされている，現モンゴル国・オリヤスタイの歴史について書かれた，『烏里雅蘇台志略』という抄本がある。この抄本の中に，「烏梁海土語」として，漢語表記によるトゥバ語の語彙が46語認められる。それらの語彙は基本的なもので，現代のロシア連邦トゥバ共和国における標準トゥバ語で充分に理解可能なものであった。『烏里雅蘇台志略』は，出版年が不明の史料であるが，本文中の記述から，19世紀初頭の情報を元にしていることがうかがわれる。この史料の製作年代を19世紀初頭とすると，トゥバ語資料としてはもちろん，南シベリアのテュルク語系言語の資料としても最古期のものの一つである。管見によれば，これまでこの語彙について触れたものはある[(1)]が，言語学の立場から考察されているものが見当たらない。記録の少ないシベリアのテュルク語の早期資料として，ここに紹介したい。

2．烏里雅蘇台志略

烏里雅蘇台志略は，城垣・道里・轄属四至・官制兵額・戸部衛門・庫存・兵部衛門・理藩院衛門・轄属部落・諸款経費・署事・領運・徴収入項・調取・軍台・台站地名相距里数・奉差官員例給騎馬廩粮数目・卡倫・孳生廠・進・査閲・

祭祀・台市・年例摺奉・遇有・月咨・蒙古語・烏梁海土語・風俗・蒙古土産・烏梁海土産・卡倫土産といった項目よりなる。主に，行政に関する抄本[2]である。このうち烏梁海土語という項目が，以下で論じるトゥバ語語彙である。

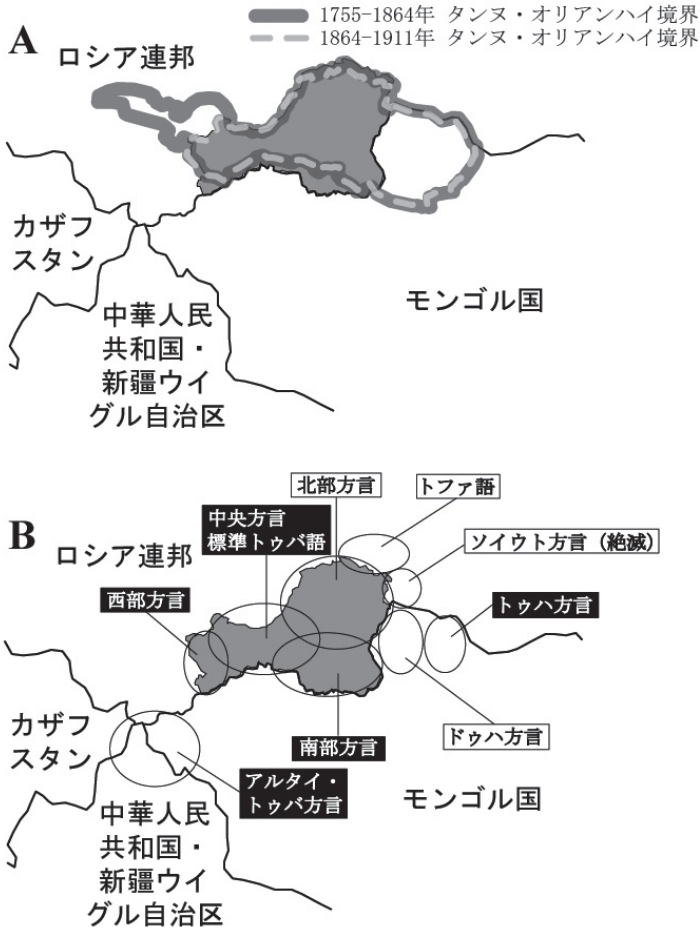

図１　清代のタンヌ・オリアンハイの領土変遷（A）と，現代トゥバ語とその姉妹語の方言分布図（B）．Bの黒枠は草原群，白抜き枠はタイガ群（脚注５参照）．灰色部分は，現・ロシア連邦トゥバ共和国．

烏里雅蘇台志略は，出版地，著者に加え，出版年が記されていない。しかしながら，いくつかの傍証から，19 世紀の初頭に成立した可能性が示唆される。傍証の一つ目は，本文中の「奉差官員例給騎馬廩粮数目」の章が，嘉慶 9 年（1804 年）の史実に基づいて記述されていることである（著者不明 1968, 39･43–44 頁）。二つ目は，烏里雅蘇台志略にみえるトゥバ語語彙の古さである。以下に詳しく述べるように，この語彙は二つの廃語と二つの意味的転用の生じた語を含んでいる。これらのことから，この語彙が 19 世紀前半のものであることが推察されるのである。さらに三つ目として，当時のタンヌ・オリアンハイ（唐努烏梁海）[3]（図 1A）のうち，オリヤスタイの定邊左副将軍領[4] が 5 旗 26 佐領より編成されている点である（著者不明 1968, 16–17 頁）。この史実は，嘉慶 16 年（1811 年）に完成した『大清會典圖』と咸豊 10 年（1860 年）の『朔方備乗』に認められる「5 旗 25 佐領」，および同治 2 年（1863 年）完成の『大清一統輿圖』にある「5 旗 26 佐領」，といった記録とほぼ一致している（Todoriki 2009，4・23–30 頁）。

以上のことから，烏里雅蘇台志略が 19 世紀の初頭の作，あるいは当時の記録をもとに編まれた可能性が推察される。

いま，先述した 1804 年をもってこの史料の年代にあてるとすると，現在までのところ，トゥバ語[5]（図 1B）および南シベリアのテュルク語系言語を扱った語彙としては，最も古いものとなる。そのため，少ない語彙ではあるが，報告する価値があると考えられる。

知る範囲で，烏里雅蘇台志略はいずれも写本であり，刊本ではない。同抄本の別本としては，少なくとも，『蒙古烏里雅蘇台志略』（著者不明 1968）として刊行されたもの，台湾・中央研究院に所蔵されている原本（闕名［出版年不明］；資料番号 A 927.52 396），国立国会図書館・東京本館に所蔵されている原本（闕名［出版年不明］；資料番号 292.26-U679），そして『清末蒙古史地資料荟萃』（马・成 1990）に組み込まれ，刊行されたものの 4 つが存在する[6]。

図２　烏里雅蘇台志略の各版の関係

今これらを比較してみると，蒙古烏里雅蘇台志略本と中央研究院本，そして国会図書館本は，ページのはじめと終わりの文字がそろっており，また同じ書式で書かれていることから，同じ工房で製作された可能性が考えられる。このうち，蒙古烏里雅蘇台志略本と中央研究院本は，別の写本だが，テキストはまったく同一であった。それに対し，清末蒙古史地資料荟萃本は，それらとは大きく書式が異なる。内容に関しても，清末蒙古史地資料荟萃本では，前２者と比べて抜けている情報がみられ(7)，不完全な写本である。一方，国会図書館本と清末蒙古史地資料荟萃本では，烏梁海土語の中に，共通するあきらかな転記ミスが２ヶ所ある。一つは，日中をあらわすトゥバ語のヒュンデュス *xündüs* を，蒙古烏里雅蘇台志略本の漢字転写では「棍都斯 gun-dou-si」にあてているのに対し，後者では「棍」を「提」に写し誤り，「提都斯 ti-dou-si」としているところ。もう一つは，平穏・平和を意味するアムル *amïr* に対し，前者は「阿木爾 a-mu-er」であるが，後者では「阿水爾 a-shui-er」に誤っているところである。

以上の限られた情報から推察すると，まず蒙古烏里雅蘇台志略本もしくは中央研究院本（系列）から国会図書館本（系列）が分かれ，その後，国会図書館本から清末蒙古史地資料荟萃本（系列）が写されたことが推察される（図 2）。

したがって，ここでは蒙古烏里雅蘇台志略本（または中央研究院本）を基本資料とし，4 章で考察をすすめる。

3．トゥバ語辞書の歴史

烏里雅蘇台志略・烏梁海土語以外の早期トゥバ語資料としてまずあげられるものは，ドイツの著名なアジア研究者であるクラプロートによる，Asia Polyglotta（Klaproth 1823）であろう。この中に，「Spaski 氏」がバイカル湖西方のトゥンカ盆地で採集し，それをクラプロートが 1810 年に記録した，トゥバ語の姉妹語（ソイウト語／方言[8]）の語彙 52 語がみえる（Klaproth 1823, 151–152 頁）。この語彙は，ここで紹介しているトゥバ語語彙の推定年代とほぼ同時代の記録である。ただし，クラプロートの語彙は，間接的な情報である上に，テュルク諸語にあまり精通していないのか，現代のトゥバ語やソイウト方言に対応させることがしばしば困難なものとなっている。ヨーロッパ語圏において，初めてある程度まとまった信頼のおけるトゥバ語（もしくはその姉妹語）の語彙が報告されたのは，カステレンによる 1847 年の調査報告（Castrén 1857, v–vi 頁）である。そこには，現在は絶滅言語となった南サモイェード諸語のコイバル語とマトル語などに対比する形で，344 語のトゥバ語が記述されている。続いて，ラードロフによって 1861 年に記録された，カラ・フル *Kara-Xöl* 地域のトゥバ語の 494 語がある（Radlov 1893–1911；Pritsak 1960, vi 頁）。そして 19 世紀末までには，ハカス人言語学者のカターノフによって，4,000 語を超えるトゥバ語が記録された（Katanov 1903）。20 世紀中旬になると，ソビエト政権の下で，ようやくある程度の分量の単語を有する辞書が出現することに

なる。ロシア語–トゥバ語辞書の 22,000 語（Pal'mbakh 1953）や，トゥバ語 - ロシア語辞書の 20,000 語（Pal'mbakh 1955）の出版がそれである。トゥバ語の研究は，現在も活発に進められているところである。

烏里雅蘇台志略以外の語彙 / 辞書の一覧を，以下に年代順にあげておく。

3. 1. トゥバ語標準方言辞書

＜トゥバ語—ロシア語辞書＞

Radlov, Vasilii Vasilevich 1893–1911 *Versuch eines Wrbuches der Türk-Dialecte / Opyt Slovarya Tyurkskikh Narechii,* vol. 1–4, Tipografii Imperatorskoi Akademii Nauk, St. Petersburg.

Katanov, Nikolai. Fyodorovich 1903 *Opyt izsledovaniya uryankhaiskago yazyka s ukazaniem glavneishikh rodstvennykh otnoshenii ego k drugim yazykam tyurkskago kornya.* Imperatorskago Kazanskago Universiteta, Kazan.

Pal'mbakh, Aleksandr Adol'fovich 1955 *Tuvinsko-russkii slovar': okolo 20000 slov.* Gosudarstvennoe Izdatel'stvo Inostrannykh i Natsional'nykh Slovarei, Moscow.

Tenishev, Edkhiam Rakhimovich 1968 *Tuvinsko-russkii slovar': okolo 22000 slov.* Sovetskaya Entsiklopediya, Moscow.

Khertek, Ya.Sh. 1975 *Tuvinsko-russkii frazeologicheskii slovar: okolo 1500 frazeologizmov.* Tuvinskoe Knizhnoe Izdatel'stvo, Kyzyl.

Tatarintsev, Boris Isakovich & D.A. Mongush 2000–(2008) *Etimologicheskii slovar' tyvinskogo yazyka.* 1–(4), Nauka, Novosibirsk.

＜ロシア語—トゥバ語辞書＞

Pal'mbakh, Aleksandr Adol'fovich 1953 *Russko-tuvinskii slovar'.* Gosudarstvennoe Izdatel'stvo Inostrannykh i Natsional'nykh Slovarei, Moscow.

Mongush, D.A. 1980 *Russko-tuvinskii slovar': 32000 slov.* Russkii Yazyka,

Moscow.

Mongush, D.A. 1988 *Russko-tuvinskii uchebnyi slovar': 5000 slov.* Russkii Yazyka, Moscow.

Mongush, D.A. & Ya.Sh. Khertek 1994 *Kratkii russko-tuvinskii словар'.* Tuvinskii Nauchno-Issledovatel'skii Institut Yazyka, Literatury i Istorii & Novosti Tuvy, Kyzyl.

＜トゥバ語―トゥバ語辞書＞

Monggush, D.A. 1967 *Tyva dyldyng orfograftyg slovary.* Tyvanyng Nom Ündürer Cheri, Kyzyl.

Monggush, D.A. 2003– *Tyva dyldyng taiylbyrlyg slovary: sösterning bolgash byzhyg sös kattyzhyyshkynnarynyng utkalary orus dylche ochulgalyg.* vol. 1– (2), Nauka, Novosibirsk.

＜英語―トゥバ語：トゥバ語―英語辞書＞

Harrison, K. David & Gregory D. S. Anderson 2002 *Tyva-angli angli-tyva söstük.* Tipografiya Goskomiteta po Pechati i Informatsii Respubliki Tyva, Kyzyl.

Anderson, Gregory D. S. & K. David Harrison 2003 *Tuvan dictionary.* Lincom Europa, Munich.

＜トゥバ語―英語辞書＞

Krueger, John Richard 1977 *Tuvan manual: area handbook, grammar, reader, glossary, bibliography.* Indiana University, Bloomington（208–241 頁に語彙）.

＜トゥバ語―日本語辞書＞

等々力政彦 2007『トゥバ語動詞一覧表』（私家版）.

中嶋善輝 2008『トゥヴァ語・日本語小事典』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

＜トゥバ語―トルコ語辞書＞

Mongush, D.A. 2005 *Tuvinsko-turetskii slovar': c grammaticheskim ocherkom*

turetskogo yazyka i ukazatelem turetskikh slov. Tipografii Goskomiteta po Pechati i Informatsii Respubliki Tyva, Kyzyl.

＜トゥバ語―ドイツ語―古代テュルク語―モンゴル語辞書＞

Ölmez, Mehmet 2007 *Tuwinischer Wortschatz mit alttürkischen und mongolischen Parallelen*. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.

＜トゥバ語―モンゴル語辞書＞

Dorlig, Ts. & B. Dadar-ool 1994 *Tyva-mool slovar'*. Bayan-Ölgii Aimgiin Khevlekh Üildver, Ölgii.

＜ドイツ語―トゥバ語：トゥバ語―ドイツ語辞書＞

Castrén, Matthias Alexander & Anton Schiefner 1857 *M. Alexander Castrén's Versuch einer koibalischen und karagassischen Sprachlehre nebst Wörterverzeichnissen aus den tatarischen Mundarten des minussinschen Kreises, im Auftrage der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*. Buchdruckerei der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, St. Petersburg.（73–166頁に，"Sojotisch"として，トゥバ語語彙が散見される）.

3. 2. トゥバ語方言・姉妹語辞書

＜アルタイ・オリアンハイ方言のトゥバ語―英語辞書＞

Mawkanuli, Talant 2005 *Jungar Tuvan texts*. Indiana University Bloomington Research Institute for Inner Asian Studies, Bloomington（227–264 頁にアルタイ・オリアンハイ方言のトゥバ語－英語語彙）.

＜ウイグル語―アルタイ・オリアンハイ方言のトゥバ語―モンゴル語―英語―日本語辞書＞

Hashimoto, Masaru & Erdene Pürevzhav 2005 "Baruun Mongol dakh' Tuva, Uigur khelnii ügsiin tukhai.." *Issures in Turkic languages —— description and language contact*——. pp. 145–155, Department of Linguistics, Kyoto University, Kyoto（146–153 頁にウイグル語－アルタイ・オリアンハイ方

言のトゥバ語－モンゴル語－英語－日本語語彙）.

＜漢語―アルタイ・オリアンハイ方言のアルタイ・トゥバ語辞典＞

吴宏伟 1999『图瓦语研究』上海远东出版社（上海）（193–232 頁に漢語－アルタイ・オリアンハイ方言のトゥバ語語彙）.

＜ソイウト語／方言―ブリアート語―ロシア語辞書＞

Klaproth, Heinrich Julius 1823 *Asia Polyglotta.* Bei A. Schubart, Paris（152 頁に語彙）.

Rassadin, Valentin Ivanovich 2003 *Soitsko-buryatsko-russkii slovar'.* Respublikanskaya Tipografiya. Ulan-Ude.

Rassadin, Valentin Ivanovich 2006 *Slovar' soiotsko-russkii.* Drofa, St. Petersburg.

＜トファ語―ロシア語辞書＞

Rassadin, Valentin Ivanovich 1971 *Fonetika i leksika tofalarskogo yazyka.* Buryatskoe Knizhnoe Izdatel'stvo. Ulan-Ude（151–240 頁にトファ語－ロシア語辞典）.

Rassadin, Valentin Ivanovich 1978 *Morfologiya tofalarskogo yazyka v sravnitel'nom osveshchenii.* Nauka, Moscow（277–283 頁にトファ語－ロシア語辞典）.

Rassadin, Valentin Ivanovich 1995 *Tofalarsko-russkii, russko-tofalarskii slovar'.* Vostochno Sibirskoe Knizhnoe Izdatel'stvo, Irkutsk.

4．烏里雅蘇台志略トゥバ語語彙

以下に，烏里雅蘇台志略のトゥバ語語彙からの転記と，それをアルファベット順にまとめたものを示す。ここにみられる漢字転写は，厳密に発音に対応するよう工夫されてはおらず，漢字転写音から原音を完全に復元することは難しい。しかしながら，現代のトゥバ語にすべて対応させるには充分であった。こ

れらの語彙の最後には，「此其大畧也」とあることから，元になった資料にはより多くのトゥバ語語彙があったことが推察される。元資料の発見が待たれる。

ここでは，上記の理由から，蒙古烏里雅蘇台志略本（著者不明 1968）を正本として扱った。他の別本の情報は，（　）カッコ内に国会図書館本と清末蒙古史地資料荟萃本に共通する異同，＜　＞カッコ内に清末蒙古史地資料荟萃本（马・成 1990）だけに認められる異同を，それぞれ示した。転記した語彙には，番号をふった。

4. 1. 烏里雅蘇台志略からの転記

烏梁海土語

稱其（1）　都統曰安板（2）　人曰克什（3）　牲畜曰瑪勒（4）　馬曰阿特（5）　駝曰提把（花）（6）　牛曰伊能（7）　羊曰輝（8）　走曰句爾＜尔＞（9）　坐曰鄂羅爾＜尔＞（10）　毡帳曰鄂克（11）　台站曰鄂爾＜尔＞德克勒（12）　日曰棍（提）都斯（13）　夜曰敦那（14）　喫曰吉（15）　喝曰伊斯（16）　來曰奇勒（17）　去曰巴勒（18）　山曰塔噶（19）　河曰奇木（20）　路曰鄂羅克（21）　茶曰賽（22）　肉曰伊特（23）　安曰阿木（水）爾＜尔＞（24）　好曰伊奇（25）　甚㕣＜麼＞汗都克（26）　新曰札（27）　舊曰額爾＜尔＞奇（28）　幾何曰哈什（29）　歲曰噶爾＜尔＞（30）　水曰都克（31）　火曰鄂特（32）　有曰多囉（33）　無曰住克（34）　一曰巴爾＜尔＞（35）　二曰額也（36）　三曰烏什（37）　四曰都魯特（38）　五曰畢斯（39）　六曰阿勒都（40）　七曰吉提（41）　八曰齊斯（42）　九曰圖斯（43）　十曰温（44）　百曰珠斯（45）　千曰蒙（46）　萬曰圖們　此其大畧也

4. 2. トゥバ語語彙 Glossary

凡例 Legend

トゥバ語のラテン転写 Tuvan word by Latin transcription［トゥバ語 Tuvan word］（漢字転写 Chinese transcription 漢字のピン音 pinyin）：***RAD*** のトゥ

バ語のラテン転写 Tuvan word by Latin transcription on ***RAD*** ［トゥバ語 Tuvan word］：***KAT*** *のトゥバ語のラテン転写 Tuvan word by Latin transcription on* ***KAT*** ［トゥバ語 Tuvan word］：日本語訳 Japanese translation 英語訳 English translation（中国語対訳 original Chinese translation）番号 number.

略号 Abbreviations

RAD：Radlov 1893–1911

RAD1 2：**RAD** の 1 巻，2 頁（以下同様）**RAD** vol. 1, p. 2 *(m.p.)*

KAT：Katanov 1903

KAT 1：**KAT** の 1 頁（以下同様）**KAT** p. 1 *(m.p.)*

*：廃語 obsoletisms

▲：意味的転用の生じた語 semantic transferred words

A/B：A または B　A or B

A

aldï [алды]（阿勒都 a-le-dou）: **RAD** –: **KAT** 1094 *aldï* [алды]: 六 six（六）39.

ambïn* [амбын]（安板 an-ban）: **RAD –: **KAT** 1095–1096 *amban / ambïn* [амбан / амбын]: 都統（中国における武官の官名）commander-in-chief, *dutong*（都統）1.

amïr [амыр]（阿木爾 a-mu-er）: **RAD** –: **KAT** 1096 *amïr* [амыр]: 平穏，平和 mild, peace, well-being（安）23.

a”t [аът]（阿特 a-te）: **RAD** –: **KAT** 1101 *at* [ат] : 馬 horse（馬）4.

B

bar- [бар-]（巴勒 ba-le）: **RAD** –: **KAT** 1214 –1215 *par* [пар]: 行くこと to go（去）17.

beš [беш]（畢斯 bi-si）: **RAD** –: **KAT** 1223 *päš* [päш]: 五 five（五）38.

bir [бир]（巴爾 ba-er）: **RAD** –: **KAT** 1224–1225 *pir* [пір] : 一 one（一）34.

Č

čaa [чаа]（札 zha）: **RAD** –: **KAT** 1318 *čaa* [чā]: 新しい new（新）26.

čedi [чеди]（吉提 ji-ti）: **RAD** –: **KAT** 1331 *čädi* [чäді]: 七 seven（七）40.

či- [чи-]（吉 ji）: **RAD** –: **KAT** 1336 *či* [чі]: 食べること to eat, meal（喫）14.

čok [чок]（住克 zhu-ke）: **RAD** –: **KAT** 1340 *čoq* [чок]: 無い，無 no, nothing（無）33.

čor- [чор-]（句爾 ju-er）: **RAD** –: **KAT** 1341 *čor* [чор]: 行くこと to go（走）8.

čüs [чүс]（珠斯 zhu-si）: **RAD** –: **KAT** 1348 *čüs* [чӱс]: 百 hundred（百）44.

D

dag [даг]（塔噶 ta-ga）: **RAD** –: **KAT** 1260 *tay* [тађ]: 山 mountain（山）18.

dört [дөрт]（都魯特 dou-lu-te）: **RAD** –: **KAT** 1287 *tört* [төрт]: 四 four（四）37.

▲*düne* [дүне]（敦那 dun-na）: **RAD** –: **KAT** 1297 *tünä* [тӱнä] / *tünää* [тӱнǟ]: 夜中に during the night / *dün* [дүн]: **RAD** –: **KAT** 1297 *tün* [тӱн]: 夜 night（夜[9]）13.

E

eki [эки]（伊奇 yi-qi）: **RAD1** 677 *äkä* [äкä]: **KAT** 1108 *äkki* [äккі]: 良い good（好）24.

ergi [эрги]（額爾奇 e-er-qi）: **RAD1** 784 *ärgä* [äргä]: **KAT** –: 古い old（舊）27.

e”t [эът]（伊特 yi-te）: **RAD** –: **KAT** 1114 *ät* [ät]: 肉 meat, flesh（肉）22.

I

iyi [ийи]（額也 e-ye）: **RAD** –: **KAT** 1121 *iŋi* [іӈі]: 二 two（二）35.

inek [инек]（伊能 yi-neng）: **RAD** –: **KAT** 1120–1121 *inäk* [іӈäк]: ウシ cattle, cow, bull（牛）6.

iš- [иш-]（伊斯 yi-si）: **RAD** –: **KAT** 1122 *iš* [іш]: 飲むこと to drink（喝）15.

K

kandïg [кандыг]（汗都克 han-dou-ke）: **RAD2** 124 *qandïγ* [кандыђ]: **KAT** 1132 *qandïγ* [кандыђ]: どんな? what? what kind of?（甚㕣）25.

kaš [каш]（哈什 ha-[shi/shen]）: **RAD** –: **KAT** 1140 *qaš* [каш]: いくら?，いくつ? how many?（幾何）28.

kel- [кел-]（奇勒 qi-le）: **RAD** –: **KAT** 1165 *käl* [käl]: 来ること to come

（來）16.

kiži [кижи]（克什 ke-[shi/shen]）: **RAD** –: **KAT** 1172 *kiži* [кіці]: 人 human, person, people（人）2.

M

mal [мал]（瑪勒 ma-le）: **RAD** –: **KAT** 1186 *mal* [мал]: 家畜 domesticated animal, livestock（牲畜）3.

muŋ [мун]（蒙 meng）: **RAD** –: **KAT** 1191 *muŋ* [мун]: 千 thousand（千）45.

O

olur- [олур-]（鄂羅爾 e-luo-er）: **RAD1** 1087 *olur* [олур]: **KAT** 1197 *olur* [олур]: 座ること，いること，置くこと to sit, set, put（坐）[9].

on [он]（温 wen）: **RAD** –: **KAT** 1197 *on* [он]: 十 ten（十）43.

oruk [орук]（鄂羅克 e-luo-ke）: **RAD1** 1057 *oruq* [орук]: **KAT** 1200 *oruq* [орук]: 道 road, pass（路）20.

ot [от]（鄂特 e-te）: **RAD1** 1096–1100 *ot* [от]: **KAT** 1201 *ot* [от]: 火 fire（火）31.

Ö

ög [өг]（鄂克 e-ke）: **RAD** –: **KAT** *ög* [öг]: 游牧テント yurt（毡帳）10.

örteel* [өртээл]（鄂爾德克勒 e-er-de-ke-le）: **RAD –: **KAT** 1207 *örtääl* [öртäл]: 駅 station（台站）11.

S

ses [сес]（齊斯 qi-si）: **RAD** –: **KAT** 1246 *säs* [сäс]: 八 eight（八）41.

sug [суг]（都克 dou-ke）: **RAD** –: **KAT** 1255 *suγ* [суђ]: 水 water（水）30.

Š

šay [шай]（賽 sai）: **RAD** –: **KAT** 1320, 1352 *čay* / *šay* [чай / шай]: 茶 tea（茶）21.

T

teve [тове]（提把 ti-ba）: **RAD3** 1118 *täbä* [тäбä]: **KAT** 1267–1268 *täbä* / *täbää* [тäбä / тäбä]: ラクダ camel（駝）5.

tos [тос]（圖斯 tu-si）: **RAD** – : **KAT** 1281 *tos* [тос]: 九 nine（九）42.

tur- [тур-]（多囉 duo-luo）: **RAD3**

1442–1445 *tur* [тур]: **KAT** 1293 *tur* [тур]: いること，有ること to be, exist（有） 32.

tümen [түмен]（圖們 tu-men）: **RAD** –: **KAT** 1295, 1297 *tübän* / *tümän* [тӱбӓн / тӱмӓн]: 万 ten thousand（萬）46.

Ü

üš [үш]（烏什 wu-[shi/shen]）: **RAD1** 1903 *üš* [ӱш]: **KAT** 1317 *üš* [ӱш]: 三 three（三）36.

X

xar [хар]（噶爾 ga-er）: **RAD** –: **KAT** 1134 *qaar* [kāp]: 歳 age（歳）29.

xem [хем]（奇木 qi-mu）: **RAD2** 1202 *käm* [кӓм]: **KAT** 1166 *käm* [кӓм]: 川 river（河）19.

xoy [хой]（輝 hui）: **RAD** –: **KAT** 1141 *qoy* [кой]: ヒツジ sheep（羊）7.

▲*xündüs* [хүндүс]（棍都斯 gun-dou-si）: **RAD** –: **KAT** 1184 *kündüs* [кӱндӱс]: 日中に during the day（日[10]）12.

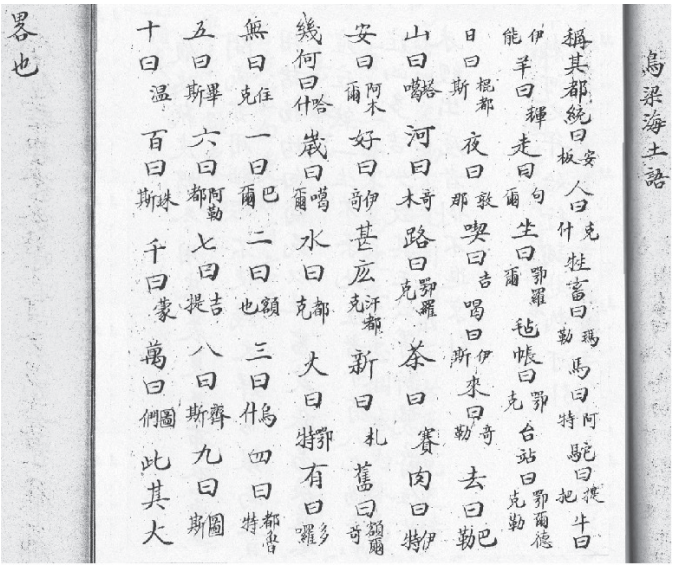

図 3　烏梁海土語

5．考察

烏里雅蘇台史略のトゥバ語語彙は，漢字転写音から当時の発音を厳密に読み解くには不充分であるが，現代のトゥバ語と対応させるには充分に正確なものであった。内容は，いずれも日常生活に必要な基本語彙であり，トゥバ語を解さない旅行者（おそらく清の役人であろう）へのガイドとして書かれているようにみえる。このなかで興味深かったのは，2つの廃語と2つの意味的転用の生じた単語の存在である。

まず廃語としては，清代の官職である「都統」= アンブン *ambïn* と，「駅」= ウルテール *örteel* がみえる。前者は，満洲語のアンバン *amban* [(11)]（Norman 1978, 15 頁）由来である。この語は，現代の辞書では *ambïn* とトゥバ語化した発音でのみ記載されているが，漢字音からはアンバン *amb**a**n* として読み解くことができる。この音は，もとの満洲語に近いことから，記述が古いものである可能性を示している。このことは，19 世紀後半にトゥバ語を調査したカターノフの辞書が *amb**a**n* と *ambïn* の両方を併記していることと整合的である。つまり，カターノフの調査が 19 世紀後半であることを考えると，この語彙はそれ以前のものであると推察されるからである。後者の「駅」は，現在はロシア語由来のバクザール *vokzal* に置き換わっている。

一方，意味的転用の生じたと考えられる語は，「夜」= ドュネ *düne* と「日」= ヒュンドュス *xündüs* である。現代のトゥバ語では，「夜」はデュン *dün* で「夜中に」はデュネ *düne* であるが，漢字音からは，どちらかといえば「夜」をデュネ *düne* と呼ぶように受けとれる。*dün* と *düne* の違いは微妙であり，漢字音のみから両方を峻別することは難しい。しかし，19 世紀後半のカターノフの調査では，「夜」が *düne* で「夜中に」は *dün* と，現代とは逆になっている点は注目される。意味的転用がはっきりと判るのは,「日」である。現代トゥバ語では，

「日」はヒュン *xün* で「日中に」はヒュンドュス *xündüs* であるが，烏里雅蘇台史略のトゥバ語語彙では，*xündüs* が「日」を意味するとある。先述のカターノフの辞書では，*xün* は「日」であるが，*xündüs* に「日中に」と「日」の両方の意味がある。このことも，烏里雅蘇台史略のトゥバ語語彙が，カターノフの調査以前のものである可能性を示している。

以上述べたように，烏里雅蘇台史略のトゥバ語語彙の廃語と意味的転用を，現代の辞書とカターノフの 19 世紀後半の調査とをあわせて考えたとき，これらの語彙が 19 世紀後半より早い時期，つまり 19 世紀前半に書かれたものであることがうかがわれるのである。このことは，先述した資料年代とも合致している。

6．おわりに

文章語としてのトゥバ語は，1930 年から確立した新しいものである（Pal' mbakh 1955, 5 頁）。したがって，それ以前のトゥバ語の記録は著しく少ない。烏里雅蘇台志略のトゥバ語語彙は，まず，この欠を補うという意味で重要である。さらに，これらの語彙に含まれる若干には，廃語や意味的転用の生じた古い語が含まれている。このことにより，既存のトゥバ語資料と比較して，歴史的な変遷の過程を追跡することが部分的に可能となることも興味深い。一方，清代とそれ以前の時代に漢語で書かれたテュルク語系の語彙は，知る限り，五對清文鑑などにみられる古代ウイグル語のみである。したがって，漢語で書かれた語彙としても，きわめて特異な資料であるといえる。

今後，烏里雅蘇台史略の元となった資料が発見されれば，さらに詳細な議論が可能となってくることが期待される。

謝　辞

本論文の草稿に対して，Ralph Leighton 氏，東京大学・安冨歩教授より貴重なコメントを戴いた。記して御礼申し上げる。本研究費の一部は大阪大学『黄砂のグローバルマネジメント～生態文化回復の戦略～』（科学研究費補助金・基盤研究（B）・課題番号 21310160），および東京大学『「共同体」概念に依拠しない秩序形成の理論歴史学～魂の脱植民地化の新しい展開』（科学研究費補助金・基盤研究（A）・課題番号 21242015）より補助を受けた。

1　唐努烏梁海研究者の樊明方は，トゥバ語語彙としてこれらの語彙を紹介している（樊 1996, 15 頁）。ただし，参照したと考えられる烏里雅蘇台志略の別本は，転記の誤りが推察される清末蒙古史地資料芸萃本（马・成 1990）からのものであり，また言語学的な考察はなされていない。本文参照。

2　もともと，『オリヤスタイ志』としてまとめられるはずの資料からの抜書きであると考えられるが，現在までのところオリヤスタイ志の完成はおろか，抄本の元になっている史料すら未刊のままに残されている。

3　清代，おおむね現在のトゥバ共和国に相当する地域は，タンヌ・オリアンハイとして編成されていた（Todoriki 2009, 3・11 頁）。

4　唐努烏梁海領内の区分けについては，Todoriki（2009）を参照（Todoriki 2009, 23–30 頁）。

5　シューニヒは，トゥバ語を，南シベリア・テュルク諸語の「サヤン・テュルク諸語」という枠組みで捉え，それらをトゥバ語とカラガス語（トファ語）に分類している（Schönig 1997, 125 頁）。同様にジューコフスカヤらは，シベリア・テュルク諸語の「サヤン亜群」の枠組みに置き，タイガ群と草原群に分類している（Zhukovskaya *et al.* 2002, 165–166 頁）。後者の場合，共和国のトゥバ語諸方言とアルタイ・トゥバ方言，そしてトゥハ方言（Ragagnin 2009）は同分類の草原群に，以下に述べるソイウト方言とトファ語，ドゥハ方言はタイガ群に，それぞれ分類される。シューニヒの「トゥバ語」はジューコフスカヤらの「草原群」に，「カラガス語」は「タイガ群」に対応できるであろう。脚注 8 も参照。

6　もう一冊，著者不明 1967『蒙古烏里雅蘇台志略』臺灣學生書局 (台北) が刊行されているが，これは著者不明 1968 と同じ写本からの影印本であるため，ここでは

取り上げなかった。

7　例えば马・成 1990 の 77 頁には，1 ページ分の文章の抜けがある。

8　ソヨト語，あるいはオキンスキー・トゥバ方言とも。南サモィエード語系の人々がトゥバ語と接触することによって生じたと考えられる言語で，トゥバ語の姉妹語として認識されている（Zhukovskaya *et al.* 2002，165–166 頁；Rassadin 2003；2006）。同書ではトゥンカ Tunkinsk のトゥバ語 Sojoten（Klaproth 1823, 151 頁）と記述されている。2007 年におこなった筆者の調査では，すでに絶滅言語となっていた（等々力 2009, 107–108 頁）。脚注 5 も参照。

9　KAT ではむしろ，*düne* が「夜」で，*dün* が「夜中に」となっている。

10　現代トゥバ語では「日」は *xün* [χyн]。しかし KAT では *xündüs* に「日」の意もある。

11　満洲語で *amban* は「大臣，高官」を意味し，「大きい，偉大な，広大な，重要な」を意味する *amba* に由来するであろう（Norman 1978, 15 頁）。

参考文献

著者不明 1968『蒙古烏里雅蘇台志略』成文出版社（台北）.

樊明方 1996『唐努烏梁海』蒙藏委員會（台北）.

马大正・成崇德 1990『清末蒙古史地资料荟萃』全国图书馆文献缩微复制中心（北京）.

闕名［出版年不明］『烏里雅蘇臺志畧不分卷』vol. 1–2,［出版社不明］［出版地不明］.

等々力政彦 2009.「共生のダイナミクス――現場からみた進化についての小論文――」『東洋文化』89, 63–120.

Castrén, Matthias Alexander & Anton Schiefner 1857 *M. Alexander Castrén's Versuch einer koibalischen und karagassischen Sprachlehre nebst Wörterverzeichnissen aus den tatarischen Mundarten des minussinschen Kreises, im Auftrage der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften. Buchdruckerei der* Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, St. Petersburg.

Katanov, Nikolai. Fyodorovich 1903 *Opyt izsledovaniya uryankhaiskago yazyka s ukazaniem glavneishikh rodstvennykh otnoshenii ego k drugim yazykam tyurkskago kornya.* Imperatorskago Kazanskago Universiteta, Kazan.

Klaproth, Heinrich Julius 1823 *Asia Polyglotta.* J.M. Eberhart und A. Schubart, Paris.

Mawkanuli, Talant 2005 *Jungar Tuvan texts.* Indiana University Bloomington Research Institute for Inner Asian Studies, Bloomington.

Norman, Jerry 1978 *A concise Manchu-English lexicon*. University of Washington Press, Seattle & London.

Pal'mbakh, Aleksandr Adol'fovich 1953 *Russko-tuvinskii slovar'*. Gosudarstvennoe Izdatel'stvo Inostrannykh i Natsional'nykh Slovarei, Moscow.

Pal'mbakh, Aleksandr Adol'fovich 1955 *Tuvinsko-russkii slovar' : okolo 20000 slov*. Gosudarstvennoe Izdatel'stvo Inostrannykh i Natsional'nykh Slovarei, Moscow.

Pritsak, Omeljan 1960 "Vorwort zum Nachdruck." in: Radlov 1960 [1893] *Versuch eines Wörterbuchers der Türk-Dialecte / Opyt Slovarya Tyurkskikh Narechii,* vol. 1, pp. v–xxvii, Mouton, The Hague.

Radlov, Vasilii Vasilevich 1893–1911 *Versuch eines Wörterbuchers der Türk-Dialecte / Opyt" Slovarya Tyurkskikh" Narechii,* vol. 1–4, Tipografii Imperatorskoi Akademii Nauk", St. Petersburg.

Radlov, Vasilii Vasilevich 1960 [1893] *Versuch eines Wörterbuchers der Türk-Dialecte / Opyt Slovarya Tyurkskikh Narechii,* vol. 1, Mouton, The Hague.

Ragagnin, Elisabetta 2009 "A rediscovered lowland Tofan variety in northern Mongolia." *Turkic Languages,* 13, pp. 224–245.

Rassadin, Valentin Ivanovich 2003 *Soitsko-buryatsko-russkii slovar'*. Respublikanskaya Tipografiya, Ulan-Ude.

Rassadin, Valentin Ivanovich 2006 *Slovar' soiotsko-russkii*. Drofa, St. Petersburg.

Schönig, Claus 1997 "A new attempt to classify the *Turkic languages* I." *Turkic Languages,* 1, pp. 117–133.

Tenishev, Edkhiam Rakhimovich 1968 *Tuvinsko-russkii slovar'*, Sovetskaya Entsiklopediya, Moscow.

Todoriki, Masahiko 2009 *Old maps of Tuva 2 —— Tannu-Uriankhai maps in eighteenth century China ——*. The Research and Information Center for Asian Studies, The Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, Tokyo.

Zhukovskaya, Nataliya L'vovna., M.V. Oreshkina & Valentin Ivanovich Rassadin 2002, "Soiotskii yazyk." in: V.P. Neroznak, R.G. Abdulatipov & Institut Lingvisticheskikh Issledovanii, Moskovskii Gosudarstvennyi Lingvisticheskii Universitet, Tsentr Yazykov i Kul'tur Severnoi Evrazii im. kn. N.S. Trubetskogo eds., *Yazyki narodov Rossii krasnaya kniga : Entsiklopedicheskii slovar'-spravochnik*. pp. 164–170, Academia, Moscow.

Possibly the oldest Tuvan vocabulary included in *Wu-li-ya-su-tai-zhi lue,* the Abridged Copy of the History of Uliastai

Masahiko TODORIKI

The *Wu-li-ya-su-tai-zhi lue* 烏里雅蘇台志略 is the Abridged Copy of the History of Uliastai, produced during the Qing era. This manuscript includes 46 words of Tuvan vocabulary called *Wu-liang-hai tu-yu* 烏梁海土語 , the Aboriginal Language of Uriankhai. The vocabulary is basic and sufficiently recognizable in the standard Tuvan of the present-day Republic of Tuva. Although the date of the publication is unknown, it is likely to be 1804 (Jia-qing 9) which consulted from the certain information including the book. This dating is also supportive by the antiquity of the several vocabulary words: two of them are obsolete and another two semantically transferred. If I assume that the Tuvan vocabulary of the History of Uliastai originates from the early nineteenth century, then this is one of the oldest reports of South Siberian Turkic languages, not just of Tuvan. Hence, I discuss this vocabulary, on which it seems there are no prior linguistic investigations.